

## アメリカ科で学んだ事が社会人になった後に如何に役立ったか 一卒業生の実例について

第2期（1954年卒）伊原 総三郎

### （1） 光輝く実り多き教養学科アメリカ科二年間の学園生活

教養学科アメリカ科で学んだ二年間は、今思い返して見ても、自分の人生の中で最も光輝く、大変充実した楽しい学生時代であった。その理由を考えて見れば、第一に同期生が十人と少なく授業は少人数のセミナー方式であり、素晴らしい教授陣から、厳しく個人授業に近いご薫陶を頂いた事、特に中屋先生には、極めて厳しい授業により鍛えられた上に、中屋スキー教室の第一期生として志賀高原や長野県の山々の山スキーを楽しみ、駒場の学園生活のみならず自然の中でも公私共に厳しく鍛えられたお陰である。

教養学科が素晴らしかった第二の理由は 授業科目で宗教、哲学、文学等の教養科目の授業を受け、同時に専門科目では、地域研究としてアメリカの歴史、政治、経済等、アメリカ全般と国際関係に亘り勉強し教養学科と専門学科の双方を同時に勉強できた事である。第三の理由は、同期生が少ないが故のお互いに深い友情が、一生続く様な貴重な友人達、明石さん、小松さん、今井さん、市谷さん等の尊敬する友人を持つ事が出来たからである。

教養学部長であられた本間長世大先輩が書かれている。“他の学部にはない教養学科特有の特徴の第一は“レイト・スペシャリゼーション”である。あまり早くから狭い専門分野に閉じこもらず、先ず広い分野に亘り学ぶ事が永い人生の将来に亘り、役立つ “ と教えられた。正にこのお言葉どおり、駒場後期の2年間に亘り、専門分野を決めず自由に広い分野に亘り勉強する事が出来た。正に実り豊かな、光輝く二年間であった。

### （2） 社会人としての経歴

教養学科を卒業し、中屋先生のご推薦により電機メーカーに入社、海外部に配属され、アメリカ4年、香港3年、台湾2年、家族と共に合計十年に亘る海外駐在を経験した。帰国後も海外部門に勤務し、定年で退職する迄海外事業の担当であった。私の半生に亘る海外事業は、其の殆どが外国との共同合弁事業であった。外国人と日本人との事業運営に対する考え方には、多くのギャップがあり、外国企業との共同事業の企業経営には多くの困難があった。しかし教養学科で学んだ事が、如何に海外合弁事業の遂行に役に立ったかを実例を挙げ

て記述し、これから就職して海外で活躍する事も多いであろう後輩の皆さんに、少しでも参考になれば、と念願して、教養学科で学んだ授業について記述します。

#### 実例 1 中屋先生の極めて厳しい授業

私が社会に出て会社業務の遂行にあたり、一番、役にたった授業は中屋先生の極めて厳しい授業であった。中屋先生からは 毎週二回ある授業毎に、新たなテーマと文献が与えられ、学生はこれを懸命に勉強して、課題の設定、問題点の摘出、それに学生各自の評論を加えてレポートにまとめ、時間厳守の上、レポートを提出せねば 単位は与えられなかった。

中屋先生のこの有名なスパルタ式授業を受けた貴重な経験のお陰で、会社に入社し、毎日のように上司より与えられる業務課題を中屋方式に従って処理し、時間厳守で素早く仕上げる事ができた。

中屋先生に厳しく鍛えられた手法に従い、処理した仕事が会社の中で少しでも評価されれば、いつも私は中屋先生が言っておられた次の言葉を思い出すのであった。 “雑巾と学生は、絞れば絞る程、よくなる”

#### 実例 2 ポールス先生の文化人類学から教えられた海外事業推進の原則

教養学科の授業の中で、外国人との合弁事業などの遂行にあたり、最も問題解決に役立つ原則を、教ったのはポールス先生の文化人類学の授業だった。

ポールス先生は文化人類学の立場から、日本人と外国人の夫々の頭の中にある物事の価値を判断する価値判断の基準は、同一ではなく、お互いに相違しているのだと強調された。

その理由は、日本の長い歴史の中で、江戸時代の二百年に亘る外国との交流を禁じた“鎖国”の歴史と、鎖国を容易に施行出来た海に囲まれた“島国という自然環境”の二つの要因により、長い期間にわたり、外国と隔離されて来た事によって、日本人は外国人とは基本的に異なる“日本人独特の価値判断基準”を、自然に持つようになって来た。

この為、ポールス先生は、日本人が外国人との共同事業を成功させる為には、次の4原則をしっかりと護らねばならないと、教えられた。

第一に、外国人と日本人は共同合弁事業運営上、当面する企業課題の価値を判断し、成果の上がる共同事業の運営を遂行する為には、夫々の頭の中に定着している価値判断の基準が、お互いに相違しているのだという事実を日本

人と外国人の双方が、しっかり認識し合う事が、第一に要請される。

第二に、お互いの異なる価値判断基準を、どちらが正しいのかを決める客観的な価値判断基準は、この世の何処にも存在しないのだ。この事実をお互いが、明確に確認し合う事が共同合弁事業の遂行のために、不可欠である。

第三に、外国人との共同事業を進展させる為には 客観的価値判断の基準がこの世に存在しない限り。お互いの徹底した論議により、それぞれの持つ条件に応じた“相対的価値判断”による基準を定め、相互の同意を得て、共同事業を進展させねばならない

第四に、ポールス先生は、お互いの価値判断基準が異なる夫々のグループが、長期に亘る共同事業を成功させる為には 双方の心の根底に、相互に相手に対する確固たる“相互信頼”が確立されねば成らない、価値判断基準に例えば差異があっても、共同事業者同志の間に相互信頼が確立されてあれば、お互いの真摯な協議を通じて、共同事業は成功する事が出来る。

この外国人との共同事業遂行のためのポールス先生の4つの原則は 私にとって、外国人との合弁事業推進に当たり、遵守すべき不可欠の厳粛な基本原則であった。実際に、ポールス先生のこの4つの海外企業との共同事業遂行の為の原則を遵守する事によって、アメリカ人や中国人との多くの合弁共同事業を成功させる事が出来た。

### 実例 3 前田護郎先生の宗教学

教養学科で一般教養の一つとして前田護郎先生の宗教学の授業があり、喜んで受講した。前田先生は人間社会にどのようにして宗教心が形成されていったのかを教えてくださいました。宗教心が人類社会に初めて形成されたのは、人類が夫々の孤立した個人生活から、グループで生活する集団生活に移動していった事に由来する、と説かれた。集団生活が形成されれば、各個人が潜在的に有する“私利私欲”より、集団の“集利集益”を先行させねばならないとの自覚が、集団の中に強化される。それは個人生活を続ける種族は、“集利集益”による集団生活の種族に、次々に吸収されていったからである。

個人の利益を捨てて、集団の利益を先行させる自覚が、人類の“徳性”とし

て集団生活の精神的基盤と成っていく。前田先生は人間の“徳”とは何か？徳の中心観念は、自分自身の利や豊かさを犠牲にしても、人間集団の利益や豊かさを優先して願い求める事、それは自分より集団の幸福を優先して願う“愛”である、と教えられた。

次に、前田先生は“神”、“仏”への信仰心の誕生、即ち宗教の誕生を、次のように教えられた。人間集団の徳性が高まれば、人間集団を規制する原則は“誰が定めるのか”を求めるようになる。そこに人間の存在を超越した“神聖な存在”が、人間集団を統括するのだ、という観念が、集団の中に集約していく。個人から集団へ、集団から“集団を統括する神聖なる存在”へ、其の神聖なる存在を“神”や“仏”として信仰する宗教心が、形成されていくと教えられた。

私が社会人となり、様々な状況の中で、個人の利益を優先するか、或いはグループの利益を優先するか？ 或いは、国際社会における宗教間の紛争による難問に巻き込まれ、其の解決を迫られる事態に、しばしば遭遇した。その折、前田先生が教えて下さった個人の利益より集団の利益を優先する事が、宗教心が芽生えていく源泉で有ったと言う教えを教訓として行動する事により、多くの難問を処理する事が出来た。

前田先生の宗教心の教えを教養学科だからこそ受けられた事を、深く感謝、している。宗教心の源泉は、人間の徳性の中心にある“愛”であるとの教えは、今でも鮮明に心に焼きついている。

### (3) まとめ

教養学科で教えて頂いた事が、社会に出てからの会社の業務推進にあたり多くの困難な事態が、起こる度ごとに、大きな教訓として事態解決に大変役立つ事が出来た。其の中から、私が経験した中で、最も大きな教訓となった中屋先生、ポールス先生、前田先生の三授業から、ご指導を受けた大変に有難い教訓について記述いたしました。

これから社会人となり、活躍なさる後輩の皆様に少しでも参考になればと願いつつ、終了させていただきます。

以上